

道徳科における「畏敬の念」の指導のあり方に関する研究

麗澤大学 富岡栄

【要旨】

本論は、道徳科における「畏敬の念」の指導が難しいといわれ、さらに、考え議論する道徳が求められている中で、今後の畏敬の念の指導のあり方について論述したものである。まず、学習指導要領における畏敬の念に関する系譜と意義について述べる。そして、畏敬の念の指導のあり方について次の通り提言を行う。教科書の使用義務により、基本的には教科書を用いることになる。よって、教材研究が重要となってくる。畏敬の念の指導においてはこれまでも体験を生かすことが重視されており、今後も共通体験となるように配慮しつつ体験を生かしたい。一方で、これまでは気持ちを問う発問が多用されてきた。だが、主人公の気持ちを問うだけでは考え議論する道徳にはなりにくい。やはり、理由や根拠を問うことが必要であり、明確な言語化を図り、それを学級で共有することが重要である。このことにより畏敬の念の指導において考え議論する道徳の実現を図っていく。

キーワード： 畏敬の念 考え議論する道徳 体験を生かす 理由や根拠を問う

1 問題の所在と目的

平成 27 年 3 月に小中学校学習指導要領の一部が改訂され、それまでの道徳の時間が、「特別の教科 道徳」（以下道徳科）として位置づけられた。移行期間を経て、小学校は平成 30 年度、中学校では平成 31 年度より全面実施となっている。この道徳の教科化の背景には、教育再生実行会議の一次提言⁽¹⁾に示されている通り、いじめに起因して尊い命が絶たれるといった痛ましい事案が発生したことや道徳の時間が歴史的な経緯に影響され大切だといわれながらも軽視化傾向にあったことなどがある。本来の人間尊重の精神を育むべき道徳教育の目標が達成されていない危機感から、抜本的な充実策として特別の教科化に至ったのである。

今般の教科化により大きく変わったことは、検定教科書が導入されるようになったことと指導要録に道徳科の記述欄が設けられたことである。「道徳の時間」時代にも、副読本といわれる民間の出版社から発行されている資料集などを使用して授業が行われてきた。ただ、道徳が教科でなかったために国による検定制度はなかったため、副読本に収められている資料の質は玉石混合であったといえる。道徳の教科化により検定を経た教科書が供されることになり、教材の質は担保されたことになる。また、評価についてはこれまで評定は不適切であるとしても評価を行うことの重要性は学習指導要領に明記され続けてきたが、現実的には行われてこなかった感がある。今回の教科化で道徳科の評価が名実共に必須事項となった。そして、指導理念が明示されたことも大きな特色である。これまでの道徳の時間が決まりきったことを言わせたり、資料中の主人公の心情理解のみに偏った授業が行われたりしているとその問題点が指摘され、このことから脱却して問題解決的な学習を取

実践研究論文

り入れるなどして、「考える道徳」、「議論する道徳」（以下考え議論する道徳と記述）へと転換を図ることが示されたのである。

このようにこれからの道徳科の授業は考え議論する道徳が求められているので、年間 35 時間（小 1 は 34 時間）の道徳科は基本的に考えたり議論したりする授業を目指していくことになる。このような授業展開を構想した時、いわゆる葛藤的な教材を用いる場合には考え議論する道徳のイメージはしやすいであろう。例えば、ハインツのジレンマ⁽²⁾を教材に用いた場合、薬を盗むべきか否かについて考え学級で議論をしていく授業スタイルは容易に想像できる。しかし、教材の中には心情的な教材といわれるものもある。このような教材については考え議論する道徳の授業イメージは持ちにくいのではないだろうか。特に、内容項目 D の視点「D 主として生命や自然、崇高なものとの関りに関すること」を扱った教材には比較的心情的な教材が多く、その上、畏敬の念を扱った教材は、これまでの指導においても難しいとの意見がある。⁽³⁾では、このような教材を用いた場合、考え議論する道徳の実践をどのように行ったらよいのであろうか。このことは、これからの道徳科の指導のあり方における課題の一つであると考えられる。そこで、本稿では内容項目「感動、畏敬の念」の特に「畏敬の念」に視点をあて、この道徳的価値を取り上げた教材について考え議論する道徳を実現していくための指導の在り方について検討していくこととする。

2 学習指導要領における「畏敬の念」に関わる内容項目の概観

学習指導要領の内容項目に「畏敬の念」の文言が見られるのは平成元年告示の学習指導要領においてである。道徳の時間が特設された昭和 33 年から現行の学習指導要領に示されている「畏敬の念」及びそれに対応すると考えられる内容項目を一覧表（表 1）にすると以下の通りである。

表 1

告示年	校種	「畏敬の念」及びそれに対応すると考えられる内容項目
昭和 33 年	小学校	美しいものや崇高なものを尊び、清らかな心を持つ。
	中学校	情操を豊かにし、文化の継承と創造に励もう。
昭和 43 年 昭和 44 年	小学校	昭和 33 年の内容と同一
	中学校	自然を愛し、美しいものにあこがれ、人間の力を越えたものを感じとることのできる心情を養うこと。
昭和 52 年 昭和 53 年	小学校	昭和 33 年の内容と同一
	中学校	自然を愛し、美しいものに感動し、崇高なものに素直にこたえる豊かな心をもつ。
平成元年	小学校	〔第 1・2 学年〕美しいものに触れ、すがすがしい心をもつ。 〔第 3・4 学年〕美しいものや気高いものに感動する心をもつ。 〔第 5・6 学年〕美しいものに感動する心や人間の力を越えたものに対する畏敬の念をもつ。
	中学校	自然を愛し、美しいものに感動する豊かな心をもち、人間の力を越えたものに対する畏敬の念を深めるようにする。
平成 10 年	小学校	平成元年の内容と同一
	中学校	自然を愛護し、美しいものに感動する豊かな心をもち、人間の力を

実践研究論文

		超えたものに対する畏敬の念を深める。
平成 20 年	小学校	平成元年の内容と同一
	中学校	平成 10 年の内容と同一
平成 29 年	小学校	〔第 1・2 学年〕美しいものに触れ、すがすがしい心をもつこと。 〔第 3・4 学年〕美しいものや気高いものに感動する心をもつこと。 〔第 5・6 学年〕美しいものや気高いものに感動する心や人間の力を超えたものに対する畏敬の念をもつこと。
	中学校	美しいものや気高いものに感動する心をもち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深めること。

「畏敬の念」の文言自体は昭和の時代の学習指導要領にはみられないが、「畏敬」が「(崇高・偉大なものを) かしこまり敬うこと」⁽⁴⁾と説明されていることを考えると、畏敬の念の内容の指導が昭和時代にも求められていたことが分かる。では、何故、直接的に「畏敬の念」と表記されなかったのか。このことの原因について城ヶ崎滋雄は以下のように分析している。昭和 33 年の『小学校道徳指導書』を実質的に執筆したのは奥田真丈⁽⁵⁾であった。その際、奥田が畏敬の念の文言を使用しなかったことについて城ヶ崎は次のように述べている。「本当は『畏敬の念』としたかっただけであろうが、当時は『道徳に対する批判的な風潮』が徳目として執筆できなかつた。時代が許さなかつたのである。そこで、『主として道徳的心情、道徳的判断力に関する内容』として『美しいものや崇高なものを尊び、清らかな心を持つ』という『やまと言葉』に置き換えた。『畏敬の念』という徳目は記述することはできなかつたが、内容を加えることはできた。」⁽⁶⁾と、修身との関連で歴史的な経緯から畏敬の念を明記できなかつたことを説明している。また、畏敬の念がはばかれる理由としては畏敬の念が宗教を連想させることもあげられよう。周知のとおり、宗教教育は教育基本法第 15 条の規定により禁止されている。「『畏敬の念』という言葉は、宗教的な雰囲気醸し出す言葉であり、それまで一般的に使われなかつた言葉であるため、教育現場にはなかなか浸透しなかつた。」⁽⁷⁾と述べられていることから、畏敬の念の言葉自体に一定の距離を置いていたことが分かる。このように、畏敬の念という文言をはばかるような時代的な背景や言葉に付きまとうイメージがあつたゆえに、道徳の時間特設当初からしばらくの間、学習指導要領においては「畏敬の念」の文言が直接的に表現されなかつたものと思われる。

道徳の時間特設以後、教育関係の文書において「畏敬の念」の文言が見られるのは、昭和 41 年に示された「期待される人間像」の中においてである。その「第 2 部 日本人にとくに期待されるもの 第 1 章 個人として 5 畏(い)敬の念をもつこと」において「以上に述べてきたさまざまなことに対し、その根底に人間として重要な一つのことがある。それは生命の根源に対して畏敬の念をもつことである。人類愛とか人間愛とかいわれるものもそれに基づくのである。」と、畏敬の念をもつことの重要性が述べられている。このように畏敬の念の用語が盛り込まれるようになったのは、教育の目的を達成していくためにはその根本において人間尊重の精神を養うことが不可欠だからである。人間尊重を支えるものこそが、相手に対しての敬意を持つことと生あるものに対する畏敬の念だとしている。このように、畏敬の念を培っていくことの重要性が指摘された。ここでは、特に生命あるも

実践研究論文

のに対する畏敬の念をもつことが強調されている。

また、昭和 62 年臨時教育審議会第 4 次答申（最終答申）では「児童・生徒が自然環境の中で生活する機会を増大させ、その生命力、活力の維持・向上、生命や自然への畏敬の念や豊かな情操の涵養を図っていくため、学校教育全体の中で『自然学校』を積極的に推進していく。」と示されている。ここでは、特に畏敬の念を育ていくために自然体験の実施が推奨されている。以上のような公の文書の中に、その理由と共に「畏敬の念」の重要性が示されたことや、時代の経過とともに抵抗感が薄れてきたことで、「畏敬の念」が平成元年の学習指導要領に明示されるようになったのではないかと考える。

3 「畏敬の念」が内容項目に位置付けられる意義

諸富祥彦は道徳授業で畏敬の念の指導を積極的に行うことを勧めている。そのわけは「“畏敬の念”こそ、ほかのあらゆる道徳的価値を基礎づけ、価値づけるものだからです。“畏敬の念”なしでは、ほかのあらゆる道徳的価値がその価値の重みを失い、軽々しいものとなってしまいます。“畏敬の念”があってこそ、ほかのあらゆる道徳的価値がその価値としての重みを取り戻すことができるのです。」⁽⁸⁾と、畏敬の念の重要性を説明し、だからこそ意欲的に指導をしていくことを説いているのである。このように、諸富は畏敬の念が道徳的価値の中心的な役割を担っている重要な価値であることを指摘している。ただ、このように畏敬の念の価値の重要性を指摘しているが、畏敬の念があらゆる道徳的価値の基礎づけになることに関しての根拠については言及していない。やはり、畏敬の念の指導が重要であることの理由や学習指導要領に位置付けられている意義について明らかにしておくことが大切だと感じる。畏敬の念の必要性の理由を知りその認識を深めていくことで、畏敬の念の指導に関しての意識がより強固なものになっていくと思われる。

金井良太は「倫理観というのは、人間の脳の中にある根本的な道徳感情に由来する。人類が誕生し集団生活を行うなかで、倫理的な感覚をもつ集団が生存に有利であったがために、倫理観をもつ脳が自然選択によって選ばれてきた。」⁽⁹⁾と述べ、人間に倫理観が育まれたのは自らの命をつないでいくために生じたのだと説明している。人間は一人では生きて行けず、必然的に集団の中で生活をしていくことになる。すると、集団生活を営んでいく中にはいろいろな軋轢が生じ、トラブルが発生する。このような中で、お互いが気持ちよく円滑に生活を営むために倫理観が育まれ道徳が生じたということであろう。すると、もし、道徳が集団生活を営んでいく上での潤滑剤だとすれば、集団生活を営む上で有用な道徳的価値さえ重視すればよいことになる。学習指導要領に示されている「A 主として自分自身に関すること」「B 主として人との関りに関すること」「C 主として集団や社会との関りに関すること」の視点の内容は、まさに、集団生活を営んでいく上で重要な価値といえる。私たちの生活に密着した価値といえよう。では、畏敬の念はどうだろうか。はたして、私たちが生活を営んでいく上で役立つのであろうか。過去においては、地震やそれに伴う津波などの自然災害、あるいは「風神」「雷神」のように自然現象を神に見立て、これらを畏敬の念の対象としていたのかもしれない。だが、それは畏敬の念の「敬う」という思いより「畏怖」つまり、おののき恐れを抱く感情のほうが強かったと思われる。

現在の道徳教育にあっては、ただ単に畏怖だけでなく、敬うということを含意した「畏敬の念」を育むことが求められている。学校教育で求められている畏敬の念の対象として

実践研究論文

は、生命、自然、人間の崇高な生き方や心の清らかさなどが考えられ、これらに関わる畏敬の念を培っていくことになる。この中で、生命に対する畏敬の念の育成の必要性を村田昇は次のように説明している。「『人間尊重の精神』は『生命に対する畏敬の念』に基づいてこそ真なるものとなりうるものであり、実際には『生命に対する畏敬の念に基づく人間尊重の精神』として捉えられるべきであろう。」⁽¹⁰⁾と述べ、教育の根幹をなす人間尊重の精神を養ううえで、生命尊重に関わる畏敬の念を培っていくことが欠かせないとしている。この意味において、生命尊重に関する畏敬の念を培っていく必要性が見いだせる。そして、自然や崇高な生き方に関わる畏敬の念を培っていくことの意義については次のように考えられる。人間の力では決して創り出すことはできない自然の織りなす美しさ雄大きさに感動し、その神秘さに触れ感じることで養われていく自然に対する畏敬の念は、人生を豊かで味わい深いものにしていくのに役立つであろう。また、崇高な生き方や人間の心の清らかさに対して養われる畏敬の念は、往々にして安きに流れ独善的になりやすい人間の心を振り返らせてくれ、人間としての尊厳を持った有意義な生き方への示唆を与えてくれると思われる。このように、「畏敬の念」が内容項目に含まれている意義は、教育の根本に関わって欠かすことができない内容であるとともに、人としてよりよく生き豊かで味わい深い人生を過ごしていくのに不可欠な内容だからこそ位置付けられているのであらうと考える。

4 これまでの道德の時間における「畏敬の念」の資料⁽¹¹⁾とその指導方法

すでに述べてきたように、「畏敬の念」の対象としては、生命、自然、人間の崇高な生き方や心の清らかさなどが考えられる。これまでの道德の時間の畏敬の念に関わる指導も、主にこれらの三つを対象に行ってきた。以下に、その際活用する資料と指導について概観することとする。

(1) 資料について

村田昇は、生命に対する畏敬の念を培っていくためには何よりも「心洗われる道德資料に出会わせる」ことが大切だと述べ、資料の質の重要性を指摘している。⁽¹²⁾そして、子供たちの発達に即した生命を尊重する心が生き方として描かれた優れた資料を開発し、それを道德の時間において感動的に出会わせたいとしている。また、諸富祥彦も「その資料をただ読むだけで“人間を超えたものからのまなざし”をリアルに感じることができ、魂の震えがとまらなくなり、身がすくむような、圧倒的な魅力、迫力、怖さを備えもった資料がなんとしても必要です。そんな力強いインパクトのある資料が開発されていけば、教師が心を込めてその資料を読み聞かせるだけで、“畏敬の念”の種が子どもたちの心に育っていくはずです。」⁽¹³⁾と述べ、圧倒的な迫力と魅力を備えた資料開発を勧めている。行安茂は生命に対する畏敬の念を育むための道德の時間の在り方としては、資料の調査研究をしていくことが第一歩だとしている。⁽¹⁴⁾人のために献身的に尽くした人物、芸術作品、パラリンピックの選手、東日本大震災に関わることなどを取り上げ資料化への視点を提案し、資料が重要な意味を持つことを指摘している。

以上のような道德の時間の資料に対する考え方については筆者自身も大いに賛同するところである。ただ、道德の時間が道德科となったことにより教科書の使用義務が発生したことで、今後開発する教材の活用には、その使用に関して若干の課題があると考えられる。もちろん、各自治体が作成した教材や自作教材の活用も考えられるが、教科書が主たる教材

実践研究論文

であることから、地域で採択された教科書を基本的に使用することになる。したがって、全ての畏敬の念に関する教材を自作の教材等に交換することは問題であると考えられる。教科書は、これまでの副読本と異なり国による検定を経た教科書であるため、教材の質は担保されているはずである。その教材を使用せず、教師の開発した教材を活用するとなれば、校内での議論が必要であろうし、教師個人の独断で決定すべきことではない。最終的には、教育課程の管理者である校長の判断のもとに変更すべきであり、教科書以外の教材の活用には慎重を期すべきである。それだけに、教科書に所収されている畏敬の念に関する教材の研究が益々重要性を増してくることになる。

(2) 体験を生かす

畏敬の念を培ううえで、体験の大切さが指摘されている。村田昇は、特に生命に対する畏敬の念を育むためには体験活動が必要であることを述べ、子供たちの体験として動植物の飼育栽培をすることや家庭や地域社会の高齢者との関りを大切にすることをあげている。⁽¹⁵⁾ もちろん、道德の時間はこのような体験活動の場として設定されているわけではないので、一時間を通して体験そのものを行うことは不適であるが、何らかの工夫をして体験や疑似体験を生かしていくことは授業の質を高めていくうえで効果的であると思われる。

生命に対する畏敬の念を主題とした指導案には、導入段階において、家庭や学校・学級で飼育栽培している動植物に関わった発問が散見される。このような自分自身が体験した、例えば水槽のメダカが気づかないうちに増えているような動物が生まれること、植物が発芽すること、時にはそれらの死に接した時に感じたことを想起させることは、ねらいを把握するうえで効果的な工夫であると思われる。また、自然に関する畏敬の念の指導において疑似体験を取り入れた事例が「縄文杉の下で」の実践例で見られる。この資料は文部省道徳教育推進指導資料 3「中学校読み物資料とその利用―主として自然や崇高なものとかかわりに関すること―」に収められており、屋久島の森に生きる推定樹齢 7200 年の根元で一晩を明かした筆者の中に老木樹に対する畏敬の念が広がるという内容である。原田周範は縄文杉の大きさを実感させるために、直径 5m の縄文杉と同じ大きさの布で作った実物大の切り株を教室の真ん中に敷き、そのうえで屋久杉自然館提供のビデオやポスターを視聴させる工夫などをしながら授業を行った。⁽¹⁶⁾ また、藤井裕喜は体育館において 16.4m のひもの輪をつくり、その輪の内側に生徒を入れ広げさせて円をつくり、縄文杉の大きさを実感させた。⁽¹⁷⁾ そして、プロジェクターを使い大型のスクリーンに BGM と共に縄文杉の映像を流し授業を展開している。このように、縄文杉を訪れたことがない生徒に臨場感を味あわせるために演出を工夫して授業を行っている。この両者の実践報告には、生徒が縄文杉の大きさに驚いたことが記されており、疑似体験の有効性が述べられている。

このように、生命や自然に関わって畏敬の念を育む道徳授業においては、体験や疑似体験を生かしたり、視覚的に訴えたりする工夫をした授業展開がよくみられる。また、視覚的に訴える工夫は、教科化となった教科書の中にも見て取れる。教科書においては上記のような体験を供する教材は不可能なので紙面一杯をつかい自然の雄大さや神秘さを視覚的に訴える工夫をしている教材が多い。⁽¹⁸⁾ ただ、これらは確かに畏敬の念を培っていくうえでの工夫ではあるが、これのみによってねらいとする畏敬の念が育まれるものではない。加えて、体験を想起させる場合は、学校行事等で全員の子供たちが体験をしていれば共通体験をしているので取り上げることに有効性はあるが、一部の生徒しか体験していない事

実践研究論文

柄を想起させた場合には個人差が生じてしまう問題点もある。体験や疑似体験を生かすことや視覚的に訴えることは効果的ではあるが、それ自体は畏敬の念を育む上で本質的なことではない。やはり、畏敬の念を培っていくためには指導過程の在り方、特に、教師の問いかけと学級集団での思考過程が重要になってくるのではないかと考える。

(3) 主人公の心情を推し量る

人間の崇高な生き方や心の清らかさから畏敬の念を培う授業で資料として多用されるものに、小学校高学年を対象とした「青の洞門」がある。これは、菊池寛の「恩讐の彼方に」を道徳授業のために資料化したものであり、「恩讐の彼方に」は中学校の道徳教科書にも教材として所収されている。「青の洞門」のおおよそのあらすじは以下の通りである。主人を殺害してしまった了海（禅海）は仏門に入り、諸国をめぐる間に、山国川の難所で多くの人が命を落とすことを知り隧道を掘ろうと決心する。長い歳月をかけて、完成間近のある日に、仇討ちを果たそうとする実之助が了海を探し出す。実之助は隧道貫通まで仇討ちは待つこととし、仕事を手伝ううちに了海の生き方に心打たれていくという物語である。この「青の洞門」を資料として用い畏敬の念の指導を行った事例を見てみたい。日浦克子の6年生を対象とした2時間扱いの実践例では、1時間目には実在する洞門の説明をして興味・関心を高めてから資料をじっくりと読ませ感想を書かせ、それを2時間目の導入で活用している。⁽¹⁹⁾ 2時間目のねらいは「美しいものに感動する心を育てるとともに、崇高な心をもとうとする心情を育てる」である。展開部分には3つの発問が示されており、いずれも実之助の心情を問う発問になっている。2番目の発問は「数日後の夜更け、槌音と念仏の声を聞いて、実之助はどう思ったでしょう。」であり、次の中心発問は『「実之助さま、お切りください」と言われたとき、実之助はどう思ったでしょう。」と気持ちを問うている。そして、終末では「感想を書く」とある。また、尾崎美津郎の6年生を対象とした指導事例でも、禅海や実之助の心情を推し量る問いが多用されている。⁽²⁰⁾ ねらいは「美しいものや崇高なものを尊び、畏敬の念をもとうとする心情を育てる。」である。資料を読む際にも「禅海の気持ちを考えながら読みましょう。」と気持ちを推し量りながら読むことを指示している。展開前段では5つの発問が示されており、中心発問と考えられる4つ目、5つ目の発問は「どう門が完成したときの禅海の気持ちはどうでしたか」「実之助が禅海の手をとり、「おしょう様」とさげんだのはどういう気持ちからでしょう」とある。このように登場人物の気持ちを問うことによってねらいに迫ろうとしている。そして、展開後段では資料から離れて、本時のねらいに関わって自分の生活を見つめる場面では「今まで、テレビや物語などで心を打たれたことはありませんか。」と問うている。

このように了海や実之助に視点をあて気持ちを問うていく指導案が他の実践例においてもみられる。だが、このような登場人物の気持ちを問うだけで、果たして崇高な心や畏敬の念が子供たちに育まれていくのか、いささかの疑問が湧いてくる。なぜなら、人間の生き方から崇高な心や畏敬の念が養われるということは、その人物の生き方を無意識に自分たちの生き方と比較していることで生じると考えられるからである。つまり、人間の生き方から崇高な心や畏敬の念が培われるということは、自分や常人と該当人物を比較したとき、とても自分にはなしえないという驚きや人知を超えたものであると感じる中で生じると捉えることができるからである。したがって、登場人物に自己を没入し気持ちを推し量るだけでは崇高な心や畏敬の念を育むには不十分で、対比的に捉えていく必要があると考

実践研究論文

える。資料中の人物の生き方に対し、知らず知らずの内に自分たちのそれと対比的に捉え感じ取った驚きや感動を整理し、理由や根拠と共に言葉や文字で表現していくことで崇高な心や畏敬の念を育むことが可能になってくるのではないだろうか。

5 道徳科における「畏敬の念」の指導のあり方

今般の学習指導要領の改訂により、これまで文章表記であった内容項目に、それを端的に表す文言が付記され示されるようになった。「畏敬の念」については単独表記ではなく、感動、畏敬の念が一つにまとめられDの視点において「感動、畏敬の念」と示されている。すでに、「2 学習指導要領における『畏敬の念』に関わる内容項目」で示した通り、「畏敬の念」の文言は小学校低学年中学年の内容項目には見られず、小学校高学年と中学校で表記されている。このような差異は発達段階を考慮してのことであろう。もちろん、感動と畏敬の念は異質なものではなく、感動を養いその延長線上に畏敬の念が育まれていくと考えられる。ただ、発達段階を考慮すると小学校低学年中学年では、ねらいに畏敬の念を育むことを設定することが困難であるので、「畏敬の念」の文言を表記しなかったものと思われる。本稿では畏敬の念に視点をあて考察していることから、以下の具体的な事例では小学校高学年と中学校を対象として検討することとする。

本稿の目的は、問題の所在でも述べた通り道徳科において考え議論する道徳が求められていることから、「畏敬の念」を扱った教材においても考え議論する道徳を目指そうとするものである。このことの実現のために、「4 これまでの道徳の時間における『畏敬の念』の資料とその指導方法」で示したこれまでの道徳科の問題点を克服するための3つの視点を生かし授業を構築していくこととする。

- ㊦基本的に教科書に所収されている教材を用いる。よって、教材研究を十分に行う。
- ㊧体験を有効に生かしていく。体験が一部の子供たちだけの体験だとすれば、学級全体で共有化していく。
- ㊨感動や畏敬の念として感じ取ったことに対して、理由や根拠を問い、言語化、文字化を図っていく。気持ちを問い、その思いを発表するだけでは考え議論する道徳にはなりにくいと思われる。考え議論する道徳の実現のためには、理由や根拠を問い、それに対して子供たちが明確に言語化を図り、学級で共有化されることが重要である。

これらの3つの視点を生かし教科書に所収されている教材で授業構成を試みる。

(1) 小学校高学年の教材「マザー＝テレサ」(「道徳6年きみがいちばんひかるとき」光村図書)

①教材の内容について

マザー＝テレサは苦しんでいる人、貧しい人々のために仕えることを決意する。街で行き倒れになっている人を介抱し、道端で死を待つしかない人々のためにも家を用意し、社会的弱者に尽くす姿が描かれている。ノーベル平和賞の受賞は多くの人々から喜びをもってむかえられた。教材全編を通じて、献身的に活動する姿が描かれており、そこには、人間の醜さや弱さは微塵も描かれていない。たとえ死を待つのみのも、人として尊重し、人間の尊厳を大切にすマザー＝テレサの生き方が示されている。

②考え議論する道徳科にしていくための指導の手立て

児童は教材に描かれているような体験はしていないであろうから、体験想起を生かして

実践研究論文

いくことは困難である。だが、クラスの中にはマザー＝テレサについての伝記を読んだりテレビやインターネットから情報を得たりしている児童もいると思われるので、マザー＝テレサについて知っていることや感じたことを述べさせることが考えられる。その際、感動したことがあったとしたら、さらに、問うていくことで、マザーへの思いが益々深まるであろうし、その話を他の児童とも共有化したい。このことにより、ねらいに迫るためのレディネスが高まっていくと思われる。

教科書では「マザー＝テレサの生き方を知って、あなたは、どんなところに心を動かされましたか。」や「マザー＝テレサは、なぜ、死にゆく人々の手をにぎり続けたのでしょうか。」の問いが示されている。これらの問いを発した時、児童は自分の感じたことを吐露すると思うが、その発言に対して理由や根拠を問うことが重要になってくる。例えば、「貧しい人のために献身的に尽くしたことに感動した。」と発言したならば、「なぜ、そのように感じたのだろう。」や「どうして、人のために尽くすことは人に感動を与えるのだろう（尊いのだろう）」のように感動の根源的なことを再度問い返すのである。そして、お互いに感じたことを発表するだけでなく、クラスで感動の根源的なことを検討することで、考え議論する道徳の実現が可能になるとと思われる。

ただ、このような偉人を扱った教材では、あまりにも常人には為しえない行為なので、崇高さに意識が向かわず「とても自分にはできない」と捉える可能性がある。このことを考慮すると、「人間にはこのような崇高な部分があり、それはあなたの中にもある」ことを教師が必要に応じ語ることも大切なことである。

(2) 中学校の教材「命の木」(「中学校道徳1年きみがいちばんひかるとき」光村図書)

①教材の内容について

本教材では、「4 これまでの道徳の時間における『畏敬の念』の資料とその指導方法」の「(2) 体験を生かす」で述べた屋久島の縄文杉を中心として、島の自然に関わる内容が記述されている。ただ、教材の筆者は椋鳩十であり、筆者の屋久島の自然や屋久杉をはじめとする縄文杉に出会ったときの感激が記されている。

②考え議論する道徳科にしていくための指導の手立て

縄文杉を直接見た経験のある生徒は、ほとんどいないであろう。だからこそ、教材では1ページの紙面を用いて縄文杉の写真が掲載されている。そして、写真ではあるが縄文杉を見たという共有化された間接体験を生かし、「樹齢7200年の縄文杉の写真を見て、あなたはどんなことを感じただろう。」が発問例として示されているのである。この問いを生徒に投げかければ「感動する」や「すごいと思う」のような感嘆する反応が予想される。だが、その発言を教師が共感的に受け止めるだけでは考え議論する道徳には発展していかない。このような発言があった場合は、「何故、感動したのだろう?」「すごいと思ったのはどんなところだろう?」のように、感じたことや思ったことの原因や根拠を問い、言語化させることが重要になってくる。

中心的な発問例として「筆者は、どんな思いで、屋久杉を『命の木』とよんだのだろう」が示されている。この発問に対しては、「脈々とつながれている命のすばらしさや偉大さを感じた。」「人間の寿命に比べれば、悠久の時間を過ごしてきた縄文杉(屋久杉)はすごい。」「縄文杉の樹形から圧倒され、人間の知を超えたものを感じたから。」などの反応が予想される。このような発言の中には「すごい」「感激した」のような感情を伴った表現が多い

実践研究論文

と思われる。そこで、「何をすごいと思ったのか?」「何に感動したか?」を明らかにしていくと共に、「何故すごいと思うのか?」「何故感動するのか?」の理由や根拠を問いたい。そして、感動やすごいと思ったことの根拠は生徒それぞれで異なると思われるので、その違いを取り上げ、意見交流を図っていくことで考え議論する道徳が実現できると考える。

6 まとめ

本研究は、「畏敬の念」の指導が難しいといわれ、さらに、道徳の教科化にともない考え議論する道徳が求められている中で、どのように畏敬の念の授業を展開していったらよいのかという問題意識からスタートした。「畏敬の念」の文言は平成元年の学習指導要領が初出ではあるが、それ以前においても内容的には同様の「崇高」「人間の力を超えたもの」が示されており、道徳の時間特設当初より学習指導要領に位置付けられていたといえる。道徳科において畏敬の念を培う意図は人としてよりよく生き豊かで味わい深い人生を過ごしていくことを願っているものである。

「畏敬の念」を育むには圧倒的な迫力のある資料の開発が望まれるが、教科書の使用義務により、基本的には教科書に所収されている教材を用いることになる。よって、教材研究が重要となってくる。畏敬の念の指導においてはこれまでも体験を生かすことが重視されており、このことは共通体験となるように配慮しつつ今後も生かしていきたい。一方で、これまでは気持ちを問う発問が多用されてきた。だが、主人公の気持ちを問うだけでは考え議論する道徳にはなりにくい。やはり、理由や根拠を問うことが必要であり、それに対し子供たちが明確に言語化を図り、それを学級で共有することが重要である。このことにより「畏敬の念」の指導において考え議論する道徳の実現が図れるであろう。

【註】

(1) 教育再生実行会議より平成 25 年 2 月 26 日付で第一次提言として「いじめの問題等への対応について」が示された。

(2) ローレンス・コールバーグ作 ハインツの奥さんが病気で死にかけているが、ある薬によって助かる可能性がある。その薬は高額でハインツには薬代を集められず、事情を話し、交渉したが断られた。困り果てたハインツは、愛する妻を救うために薬を盗んだ。

(3) 月刊誌『道徳教育』明治図書では、2006 年 9 月号と 2010 年 12 月号において畏敬の念に関する特集を組んでいる。その中で、多くの教師が畏敬の念の指導の難しさを述べている。松川義信は「畏敬の念を高めることは難しい。なぜなら体験によって高められるものだからである。」(2006 年 9 月号 p.52) と述べ、また、中野敬一も「畏敬の念を、道徳の時間で指導することは簡単なことではないと思う。なぜならば具体的な形として子どもたちに示すことが難しいからである。」(2010 年 12 月号 p.25) と述べている。

(4) 新村出編『広辞苑 第七版』岩波書店 2018 年

(5) 貝塚茂樹「日本の道徳教育を築き上げた人々 46 昭和三十三年版小学校学習指導要領の執筆者 奥田真丈」『日本道徳教育学会報』第 53 号 4 面

(6) 城ヶ崎滋雄『戦後道徳教育における「個人と共同体」—その歴史的・倫理的考察—』麗澤大学大学院修士論文(未刊行) 2020 年 P.32

(7) 藤田善正、俵谷好一「感動、畏敬の念を扱った道徳教材の指導のあり方」『大阪総合

実践研究論文

保育大学紀要 第14号 2019』 p.1

(8) 諸富祥彦編著『人間を超えたものへの「畏敬の念」の道徳授業 小学校』明治図書 2007年 p.8

(9) 金井良太著『脳に刻まれたモラルの起源』岩波書店 2013年 p.6

(10) 村田昇著『「畏敬の念」の指導—こころ・いのち・体験—』明治図書 1993年 p.51

(11) 道徳科や道徳の時間で活用する「読み物」は、道徳科においては教材、道徳の時間においては資料と明確な区別をつけて表記する。

(12) 上掲書 (10) p.99

(13) 上掲書 (8) p.16

(14) 行安茂、廣川正昭編著『戦後道徳教育を築いた人々と 21世紀の課題』教育出版 2012年 pp.321-323

(15) 上掲書 (10) p.98

(16) 原田周範「雄大な大自然と小さく有限な人間～「縄文杉の下で」の授業を通して」諸富祥彦編著『人間を超えたものへの「畏敬の念」の道徳授業 中学校』明治図書 2007年 p.88

(17) 藤井裕喜「学校の中で「大自然」を演出する」『道徳教育』2010年12月号 明治図書 p.34

(18) 『中学道徳1 とびだそう未来へ』教育出版「オーロラ向こうに」では、pp.158-159、pp.162-163の4ページ全面にオーロラの写真が掲載されている。また、中学校『新しい道徳2』東京書籍 pp.112-113では見開き2ページ全部に富士山及びそ上空の雲の写真が掲載されている。「畏敬の念」を扱った教材では写真を多用する傾向が他社の教科書に見られる。

(19) 日浦克子「「畏敬の念」の授業 心に響く道徳授業の指導の工夫」月刊誌『道徳教育』2006年9月号 pp.46-48

(20) 尾崎美津郎「第六学年 3-(3)の実践例 青のどう門」 押谷由夫、立石喜男編著『小学校道徳 内容項目の研究と実践 美しさや崇高さに感動する』明治図書 1991年 pp.139-148

A Study on Some Methods of Teaching "Awe" in Moral Studies

TOMIOKA Sakae

Keywords : Awe, thinking and discussing morality, making the most of experience,
asking why and why not

【Abstract】

This paper discusses the future of the teaching of awe in moral education in the current situation where it is said to be difficult to teach a sense of awe in moral education and where moral education through discussion is required. First, I will discuss the genealogy and significance of the concept of awe in the Courses of Study. Then, the following suggestions are made for the future of the teaching of awe. Due to the obligation to use textbooks, it is basically a textbook that should be used. Therefore, the study of textbooks becomes important. The teaching of reverence has always emphasized the importance of making use of experience. and we want to continue to make use of that experience while giving consideration to making it a common experience. On the other hand, questions about the feeling of the protagonist have been used frequently in the past. However, simply asking about the protagonist's feelings is unlikely to lead to a moral discussion. It is necessary to ask the students why they are feeling the way they are feeling, and it is important to clearly articulate the reasons for their feelings and to share them with the class. By doing so, we aim to realize a moral code of thought and discussion in the teaching of reverence.